



頭山滿思想集成

增補新版

頭山滿著

書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

本書は書肆心水既刊『頭山満言志録』と『頭山満直話集』を合冊化したものです

頭山満思想集成 目次

大西郷遺訓を読む 21

大西郷遺訓 23

頭山満講評 71

直話集 I 141

自己を語る 143
人物評 159
時評・訓話 177

直話集 II 191

一代回顧談 192

*

附録 頭山満先生 夢野久作著 338

附録 頭山満写真集 375

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

詳細目次

大西郷遺訓を読む

大西郷遺訓（底本写真版）（23）

頭山満講評（71）

直話集 I

自己を語る

立雲という号（143）

俺は若い（143）

水泳ぎ（144）

俺の子供の時分（144）

青年期の東京生活（147）

洋服着た写真（148）

薪売り（149）

簞売り（150）

新聞の創刊（150）

山（152）

高場塾（153）

親（154）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

俺の病気(157)
覚えて居る程の事は(158)

人物評

大西郷と自分(159)
征韓論の真相(162)
故山における大西郷(163)
西行(166)
中江兆民(168)
金玉均(169)
井上馨と鳥尾小弥太の人種改良議論(170)
勝と岩倉(171)
狂志士藤森天山(172)
荒尾精には面白い話がある(173)
限の案内に犬(176)

時評・訓話

アジアの殖民地(177)
支那の出兵(178)
支那の留学生(178)
英米と償金(180)
朝鮮統治(180)
釜入りなんぞは至極面白かろう(180)
立派で危険な建物(182)
成り金よりも成り人じゃ(183)
多勢は要らぬ、一人がいい(183)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

直話集Ⅱ 一代回顧談

鼻くえ猿 (184)

主とする処が違ふ (185)

金で割に合う位の命では安いものじゃ (186)

済まぬと思うだけがいくらか済む (187)

無人の境 (188)

人の一生 (188)

優しきものあつて初めて敵なし (189)

三つの幸福 (189)

死んだら (190)

誠 (190)

神 (190)

はしがき (編者) (192)

これが自分の身の上話の初めてじゃ (193)

本を読む事は好きであつた (193)

独りで淋しくない (193)

少時私わの読書法 (194)

己おれは泣かぬ児こであつた (194)

俺の碁将棋は真剣だと強くなる (195)

生まれながらのだくさ者 (196)

仙人修業の三年 (196)

平野国臣と近藤勇 (197)

平岡は行儀がよかった (198)

江藤新平の拳兵 (199)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

正直者、前原一誠 (199)
私の獄中生活 (200)
入獄中、母の訃音 (201)
南洲の師友、川口雪蓬 (203)
二度目の鹿兒島入り (205)
河野主一郎は起たなかった (206)
大珍物の洋傘 (207)
気位は何時も大名じゃ (207)
大久保暗殺の報 (208)
土佐の民権婆さん (208)
東北無銭漫遊 (209)
仙台に三日 (210)
弘前で木戸御免 (210)
黒石町で演説で飯が食えた (210)
端座、漢学先生を凹ます (211)
腹と脚は誰にも劣けんじゃった (212)
越前へ無銭旅行 (213)
土佐で政談演説 (213)
福岡でも演説が流行 (214)
板垣は純忠の士 (214)
福陵新聞時代 (215)
玄洋社の青年訓練 (216)
河豚は食わさぬ (217)
薪買わんか (217)
来島が大野仁平を撲る (218)
会心の友、荒尾精 (218)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

荒尾内閣を見たかった(219)
偉人は五百年に一度降る(219)
後藤象二郎の太肚(220)
条件付きの金は借りぬ(221)
天下人無きを歎ずるなかれ(221)
条約改正騒ぎ前後(222)
小身の豪傑、小村寿太郎(223)
小村の六升酒(224)
小男の小村、暴魯を挫く(224)
傑僧南天棒(225)
鹿鳴館の馬鹿踊り連を糞溜めへ(225)
伊藤の智は横へ廻った(226)
何んでもやるぞ(226)
陸実(226)
三浦の碁は腕力で行く(227)
風鈴均一碁で三浦の大敗(227)
鳥尾訪問の失敗(228)
鳥尾、井上を罵る(229)
「お前は許さん」と井上へ(230)
大晦日に廻る金(231)
浜の家無銭寄留(232)
副島の色男気取り(232)
佐々の「禿げ」(233)
これが誠の道じやろう(234)
安場の三ば(234)
「今日天下の急務は頭山が金を作る事です」(236)

私を漢の高祖に見立てた（236）
副島の胆伸ばし（237）
岡田の女将を驚かす（238）
年中正月、常二十才（239）
頭山とは如何なる仁か？（239）
お妻の髪を切った話か？（240）
政府の腰抜けを追い分けて諷する（240）
鼻かけの英雄（241）
従道、大西郷に叱らる（242）
大西郷、橋本左内に叱らる（243）
大西郷の師友、伊知地正治（244）
大西郷の敬服した久坂玄瑞（244）
木戸、大久保を罵る（245）
木戸、黒田を投げ倒す（247）
南洲の無頓着（248）
高田が斬られた時の事か？（249）
番町屋敷の化物（250）
頭山が吏党になった（250）
「頭山を斬る」という（250）
小身非力の豪傑、大井憲太郎（251）
大井の隣（252）
星も大井には閉口（252）
星が私を議員に担ごうとした（252）
星を助けた（253）
剣難もぐり（253）
地税軽減問題（254）

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

松方総理を叱る(254)
伊藤は能く人才を用いた(255)
品川へ借金よこぎの相談(256)
品川は善人じゃった(257)
丸裸で高利貸撃退(258)
国民協会入党拒絶(258)
大津事件の時(259)
硬骨漢、児島惟謙(260)
日露戦争、桂太郎(260)
シルクハット問題(261)
聴かなければ伊藤を斬る(262)
南洋視察費を飲む(262)
金の貸しっぷり、金子元二郎(263)
炭坑を売った七十万円の行方か？(264)
借金証書は正気まき歌の文句(265)
支那へ入院したようじゃ(265)
美和も気の強い奴じゃ(266)
仏人リシャール来訪(266)
大隈との会見(267)
室蘭埋め立て願い(268)
頭山の嘘は公然(269)
青木周蔵は変わり者(269)
権兵衛大臣(271)
孫文をどうする(271)
頼って出る化物(272)
インド亡命客ボース(272)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

内田良平氏談

深夜の電話 (274)

インド人の神隠し (275)

明けっ放しの答弁 (277)

私の顔は潰れても…… (278)

首にして渡そうか！ (281) (以上内田良平談)

ボース氏の談を綜合して

頭山翁を訪問す (284)

日本退去の命令 (286)

インド人消えて無くなる (289)

新宿の中村屋へ (291)

病気が取り持った奇縁 (293)

日本政府の保護下に置かる (294)

上総一の宮の一ト夏 (295)

日印結婚 (296)

忠実なりし妻よ！ (297)

日本へ渡るまで (298)

虎口を脱れる (299)

香港の災厄 (301)

帰化日本人として (303) (以上ボース談)

三浦と大隈 (304)

天下の山県になり切れんのが惜しい (305)

山県は首でも取られると思うたのじゃろう (305)

安達謙蔵、白で碁を打て (305)

清浦はおとなしい (306)
総理級の人々 (306)
護憲三派運動と純正普選の時 (306)
私の握手の始め、熱海に三浦を見舞う (307)
立雲号の由来 (308)
宗演と禅問答 (309)
東宮御外遊時、二荒伯の誓文 (309)
杉浦は五重の塔 (309)
杉浦は真君子 (310)
俺は田中と同じ年に死ぬと言われた (310)
一遍で小便が出し切るか? (311)
遷宮式に二日断食 (311)
何よりも放蕩を慎む事じゃ (312)
御慶事式場でネクタイの借り物 (312)
震災の時 (312)
霊南坂の家が焼けた (313)
議員立候補の推薦状 (313)
誕辰祝いが大袈裟でいささか迷惑 (314)
水戸家の昇爵時、宮相と会見 (315)
出雲大社へお詣り (316)
大本教と立雲翁 (316)
板垣伯の銅像 (317)
喜楽の女将、井上を凹ます (318)
女は面倒見てやる事じゃ (319)
犬養総理は貫録たっぷり (319)
議会のだらしなさ (320)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

神に仕える者の仕合わせ (320)
米国新聞記者の来訪記 (321)
早朝の明治神宮参拝 (323)
雲右衛門に素語り三席 (323)
宮崎滔天の浪花節 (324)
翁と遠山満との写真 (325)
木戸が差した兼定 (325)
私はあまり執着しない (326)
相撲取りは常陸と太刀 (326)
死んで生まれ変われ (326)
革丙將軍の遺物 (327)
飛行機は愉快々々 (327)
美人天上より落つ (328)
これは役に立たん方じゃ (329)
七日の断食——一食二十杯 (329)
胃潰瘍を三度やった (329)
顔が売れると世間へ通る (329)
親に似ぬ子、似た子 (330)
俺は欺かれん (330)
紙幣は袂へ無造作に (331)
石塔の頬かぶり (331)
ふりまらで大弓 (331)
私の化物退治 (332)
俺の書は頭山流じゃ (332)
私の印は貫いものばかり (334)
私の若返り法 (334)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

モウ一度四十才から出直したい！ (335)
俺は馬鹿運が強い (336)
敵を倒してそこに安全を求むる (336)
富相破りの貧乏生活じゃ (336)
外国の憲法論で日本を論ずる間違い (337)

附録

頭山満先生

夢野久作著

(338)

附録

頭山満写真集

(375)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

頭山満思想集成

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は、書肆心水既刊『頭山満言志録』と『頭山満直話集』の収録内容を合冊化したものである。合冊化にあたり判型を四六判からA5判に改変し、若干の補訂を施して新たな版とした（二〇一一年版）。その後さらに「写真集」を附録し増補新版とした（二〇一六年版）。

表記について

一、『頭山満言志録』では底本どおりに旧仮名遣いを使用した。合冊化にあたり新仮名遣いに改めた。どの底本も漢字は旧字体表記であるが、本書では新字体で表記した（「龍」のみ例外として旧字体を使用）。送り仮名も現代風に加減按配し、読みやすいように読点を加えたところもある（「にさん」と読む「二三」を「二、三」とするなど）。踊り字の使用も現今一般に使用される「々」のみとした（一六八頁のみ例外）。西郷隆盛遺訓他の引用文もそのように表記を現代化した。が、一部の詩歌等の引用文において古い表記法のままのほうが望ましいと判断したところは底本表記のままとした。

一、表記現代化の一環として、現今一般に漢字表記しないものを仮名表記に変更した。現在では不使用傾向にある漢字の指示詞・副詞・当て字等、例えば次のようなものである。其、之、是、此、斯、亦、稍、猶、兎角、印度。

一、読み仮名ルビは、底本にあるものを選択的に採用し、適宜補足した。ママのルビ（原文のママの意）と、（ ）括りのルビ、および行内の（ ）括り二行割注は本書刊行所が参考までに附したものである。

一、その他、改行箇所やレイアウト、鈎括弧の使い方など、適宜統一的に整理して表記した。

底本について

一、本書に収録した文章の底本は次の通り（本書の章立てと章題は本書刊行所によるものである）。

＊『頭山満言志録』収録分

大西郷遺訓を読む

立雲頭山満先生講評、鹿野雜賀博愛筆記（政教社編）、『改訂増補 大西郷遺訓』、政教社、昭和十六年十二月五日二十一日版刊行（大正十四年三月十日初版刊行）の全文。「大西郷遺訓」の部分は写真版で収録した。

直話集Ⅰ「人物評」のうち「大西郷と自分」「征韓論の真相」「故山における大西郷」の三篇
頭山満述、吉田綱明記、『英雄ヲ語ル』、時代社、昭和十七年九月十九日刊行。「西郷南洲」の章より（小見出しの文言は一部変更した）。

直話集Ⅰのうち右項三篇以外の全て

柴田徳次郎編、『頭山翁清話』、大民俱樂部、大正十二年五月十日五版刊行（大正十二年四月二十日初版刊行）および、同編者同書名（大民文庫版）、大民社出版部刊、昭和十五年十二月二十八日初版刊行。右記の二書との話題重複を避け、かつ、頭山満が自身を語っているもの、頭山満の考えがとりわけよく表れていると感じられるものを選択し抄録した。「自己を語る」「人物評」「時評・訓話」の括りは本書刊行所が設け、これにより談話の配列も按配した。小見出しの文言はこの括りとの兼ね合い等から変更したものがある。昭和十五年刊の文庫版は増補改訂版であるが、その版より採用した談話は冒頭の二篇のみである。

＊『頭山満直話集』収録分

直話集Ⅱ 一代回顧談

頭山満翁直話、編者薄田斬雲筆録、『頭山満翁の真面目』、平凡社、昭和七年六月十八日刊行。その本篇全文（直話部分）を収録。同書併録の「最近頭山翁に対する諸家の感想」と編者のエッセイ「双柿舎から常盤松へ（逍遙翁から立雲翁へ）」は収録していない。

＊以上、『頭山満言志録』収録分と『頭山満直話集』収録分とで話題が重なるところがあるが、そのうち、ほとんど全て同じ話といえる場合には、『頭山満直話集』のほう（本書直話集Ⅱ）を省いた。

附録 頭山満先生（夢野久作著）

夢野久作著、西原和海編、『夢野久作著作集5』、葦書房、平成七年二月二十五日初版刊行所収、「頭山満先生」の全文（初出は『日本少年』昭和十一年一月号～四月号の四回連載。これは夢野久作歿年の作品である）。

附記

一、大正時代から昭和十年代にかけて頭山満の談話を編んだ書物は右記以外にも少なくないが、重複する話題が多く、また基本的に同じ本と言えるものもある。(例えば、『胆もつ玉』大正六年、『西郷南洲先生』昭和三年、『胆つ玉英雄風雲録』昭和四年、『重大国事の秘密を語る』昭和十一年、『胆つ玉』昭和十三年、『日本精神と腹』昭和十四年、『頭山翁警世百話』昭和十五年、『頭山満翁語録』昭和十八年、等。これら、および同名書物の別版においては、同じ談話でも細部の違いや時局を反映したようなニュアンスの違いが見られる)。右記『頭山満翁の真面目』編者の後年著書(昭和十二年刊)に、『頭山満翁の真面目』収録の直話をもとに通俗読み物風に仕立てた『頭山満翁一代記』がある。

一、『大西郷遺訓』については、底本の「改定増補版凡例(本書二十二頁)」に記されているように、西郷隆盛の遺訓は初版と改訂増補版では別のものが収録・引用されている(初版は山路愛山編『南洲全集』の写出で、改訂増補版は莊内藩士の筆録原本の写出)。本書において『大西郷遺訓』の底本は改訂増補版としたが、頭山満が講評した西郷隆盛の遺訓は山路愛山編『南洲全集』の写出であることから、西郷隆盛の遺訓については初版収録のそれを使用すべきかと検討したが、改訂増補版において頭山満の講評文に入っていることもあり、西郷隆盛の遺訓も改訂増補版収録のものを使用した。本文中の誤植らしきもののうち、初版に照らした結果、全篇新組の改訂版における誤植と判断されたものは初版によって訂正した。

一、「直話集Ⅱ 一代回顧談」の筆録編者薄田斬雲の略歴等は次の通り。一八七七年生、一九五六年歿。本名貞敬。小説家、伝記作家。東京専門学校(早稲田大学前身)文学科選科卒。京成日報記者、早稲田大学出版部編集委員を経て、小説・戯曲等を自然主義的時流の中で発表。後年、歴史や国家社会への関心を深め、人物伝等を著す。

大西郷遺訓を読む

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

改定増補版凡例

一、本書（改定増補版）刊行は巻末附記「大西郷遺訓と講評」に明らかなる如く大正十四年三月、初版刊行爾来版を重ねること廿三回に及べるものなるが今や我日本帝国は日支事変より大東亜戦争へと進展せる際、ここに内容に根本的改定増補（改定増補版）を加え、非常時局の現代人士に必読の修養書として改めて刊行するものである。（初版との異同を、改定増補と感ぜられるほどの多量の変更は見られる）

一、本書初刊に引用したる南洲翁遺訓全文は、山路愛山編『南洲全集』より写出して立雲翁に提示したるものであったが、今改定版を出すに当り、荘内藩士の筆録にかかる原本に照応して全文をこれに改めた。

一、荘内本以外、南洲翁が子弟に訓話せられたものや、遺訓として誦記するに足る数篇をも新たに添加した。

一、殊に南洲翁が自ら記して子弟に与えられた「死生の説」は、翁の人生観の根義を示されたものとして、不朽の文字であるので、新たに立雲翁の講評を請い、本書に附加して置いた。吉田松陰先生がその弟子品川弥二郎に与えられた「死生の説」を読んでも、維新勤皇志士の活動の根柢に横たわれる一大基本精神が、この「死生観」に徹しありたることを思えば、鍋嶋論語と称せらるる『葉隠』が、武士道の根義を教えて「死ぬことと見つけた」といえるも、故ある哉と思わしむるのである。

一、この書世に出て既に十七年。年と共に世に愛読せらるるのは、大西郷の人格の千古に朽ちざるものとあると、これを講ずる頭山立雲翁の至評の、適として肯綮に中るものあるが為である。遠く南洲翁の英魂に謝し、近く立雲翁のいよいよ健在ならんことを祈り、ここに改定増補版を世に問わんとするものである。

昭和十六年九月

大西郷遺訓

一、廟堂に立ちて大政を爲すは、天道を行ふものなれば、些とも私を挟みては濟まぬもの也。いかにも心を公平に操り正道を蹈み、廣く賢人を撰擧し、能く其の職に任ふる人を擧げて政柄を執らしむるは、即ち天意也。夫れ故眞に賢人と認る以上は、直に我か職を譲る程ならては叶はぬものぞ。故に何程國家に勳勞有るとも、其の職に任へぬ人を官

職を以て賞するは、善からぬことの第一也。官は其の人を撰びて之れを授け、功有る者には俸祿を以て賞し、之れを愛し置くものぞと申さるるに付き、然らば尙書仲虺之誥に、德懋んなるは官を懋んにし、功懋んなるは賞を懋んにすると之れ有り、徳と官と相ひ配し、功と賞と相ひ對するは此の義にて候ひしやと請問せしに、翁欣然として、其の通りぞと申されき。

一、賢人百官を總へ、政權一途に歸し、一格の國體

頭山満講評

立雲 頭山満翁講評
政 教 社 編

一、廟堂（朝廷、天下の大政を司る所）に立ちて大政を為すは、天道を行ふものなれば、些とも私を挟みては済まぬもの也。いかにも心を公平に操り、正道を踏み、広く賢人を撰挙し、能くその職に任ずる人を挙げて、政柄（せいへい）を執らしむるは、即ち天意也。それ故真に賢人と認むる以上は、直ちに我が職を譲る程ならでは叶わぬものぞ。故に何程国家に勲勞有るとも、その職に任えぬ人を、官職を以て賞するは、善からぬことの第一也。官はその人を撰びてこれを授け、功有る者には俸禄を以て賞し、これを愛し置くものと申さるるに付き、然らば尚書仲虺之誥に、徳懋（とくさか）んなるは官を懋んにし、功懋（こうさか）んなるは賞を懋んにするとこれ有り、徳と官と相配し、功と賞と相対するは、この義にて候いしやと請問せしに、翁欣然としてその通りぞと申されき。

（註）尚書仲虺之誥云々引用の原文は次の如くである。『尚書』は『書経』、仲虺は湯王の左相である。
仲虺之誥（こう）（尚書卷之三尚書）

惟王不迹声色。不殖貨利。徳懋懋官。功懋懋賞。

用人_レ惟己。改過不_レ吝。克寬克仁。彰信_二兆民_一。

●立雲先生曰く—— 南洲翁に遺訓があるということは兼ねて耳_{（かみ）}にして居ったが、これを見るのは今が初めて

である。一読して偉大なる翁の人格に面の当り接するような思いがする。ここに記されたのは、翁日常の片言隻句_{（せつこ）}に過ぎまいが実に大したものじゃ。これだけのことが完全に行われていたら、上に明治天皇の在_{（あ）}わすあり、今少し日本も立派なものになっていたであろうに、後年、政治家にその人を得ず、寔に残念なことが多かった。この中の一箇条でも、完全に行おうとすれば、容易ならぬ努力と決心と練磨_{（れんま）}とが要るのじゃ。然るにこの全部が南洲翁の人格であつたかと思うと、実にその偉大さが思いやられる。能く翁の申さるるところを熟読_{（じやく）}翫味_{（くわんみ）}して、君国の為に赤誠を捧げなければならぬのじゃ。

「真に賢人と認むる以上は、直ちに我が職を譲る程ならでは、叶わぬものぞ」といわれているが、ここが肝腎のところじゃ。私の心があるから、何処までも自分の我を張ろうとしたり、自己の勢力を維持したりしようとするのじゃ。見玉え、近時非常時国難というのに、見るに忍びない政争や行詰りは皆、賢人と認むれば、何時でも我が職を譲ろうとする誠心がないからじゃ。

「官はその人を撰びてこれを授けよ」というて居られるが、翁の深い用意のほどが、この辺でも察せられるのじゃ。これに就いて、丁度思い出すことがある。西郷従道さんが、或る時のお話に、

「隆盛がよく申して居りましたが、大隈重信には、教育のことを授けてはならぬ。又、井上馨_{（かおる）}には、決して財政のことを任せてはならぬ、とかように申して居りました」

とのことじゃ。然るに大隈の一生を見ると、政治家というよりも教育家として有名になって居るし、又一方の井上は、明治の財政家として、自らも任じ、人も推すようになってゐる。ここに南洲翁が、人物を見らるるに、独特の眼光を持って居らるることがわかるのじゃ。南洲翁の意中_{（おんちゆう）}を付度_{（そんたく）}して見たら、大隈は心に誠が足らぬ、誠の

足りない者に、天下風教の源であり、且つ人倫の大本を教うる、教育家の任務を託すべきではないと思われたものと察せられる。井上には、南洲翁が或る時、

「井上さん、あんたは三菱の番頭になられてはどうでござす」

といわれたことがあるそうじゃ。井上は金を溜めることは知って居ても、公私の別あることを知らぬ。公私の別を知らぬ人間に、苟も皇室の御財政、延いては、国家財政の重任が委せらるるものではないというのが南洲翁の意中であつたように思う。

財政家を以つて任じている井上に、国家の財政を任じてはならぬといい、大教育家として許されている大隈に、教育のことは委せられぬといわれた南洲翁の眼光は、遙かに俗眼を抜いているものがあるヨ。

一、賢人百官を総べ、政權一途に歸し、一格の国体定制無ければ、縦令人材を登用し、言路を開き衆説を容るるとも、取舎方向無く、事業雜駁にして成功有るべからず。昨日出でし命令の、今日忽ち引き易うると云う様なるも、皆統轄する所一ならずして、施政の方針一定せざるの致す所也。

◆立雲先生曰く—— 簡にして要を得、この上一言も加える必要はない。国の本体というものが、ちゃんと立つて居らんければ、することなすこと、鵙の嘴と喰い違ってしまふのじゃ。自分がよくいうことじゃが、政治家というものは、善い事をして飯を食つとるものじゃ。ところが近ごろザラにある政治家という手合いは、善い事どころか、悪い事をして飯を食う者ようになってしまふた。大へんな料簡違いじゃ。自分らが悪い事をするくらいなら、まだいいとしても、先に人がしておいた善い事までも、叩壊してしまふようなことをしよるデ。

政党内閣なんていうものも、今では昔話になりかかっているが、一廉人民の為になるばしのごと吹聴して来たものだが、見玉え、誰が人民の為になることをしたか。皆んな党利党勢で、己れ等が党派の地盤ばかりしか考え

直話集 I

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com



観樹三浦梧楼（70 歳）と立雲頭山満（61 歳）

自己を語る

立雲という号

俺は、人などを送ったり、迎えたりせぬ奴じゃ。

しかし、三浦(橋本)が朝鮮で、王妃事件(閔妃殺害事件)の為に牢に入れられるやらして、帰って来ると云うから、あの時はどこまでか迎いに行った。

佐々友房や、井上角五郎やら一所であったが、三浦は俺の行った事を特に悦んだ。

その後いつであったか。俺の号の立雲というのを、どう云うワケかときくから、ワケと云う程のことはない、唯、いつも「フリ○○」で、雲の上に立って居るつもりじゃと云ったら、三浦が、「フリ○○」は面白い、「フリ○○」はよいと云ってヒドク感心した。

俺は若い

俺は若い。

まだ赤ん坊じゃ。

赤ん坊に、白髯の生えたようなものじゃ。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

水泳ぎ

水泳ぎは、子供の時から好きじゃった、少々の年長者よりは、能く無鉄砲な泳ぎをした。

十一の時、近所の十三位の兄と一所に浜に泳ぎに行つた。俺は先に飛び込んで、跳ね廻つたが、年上の兄は泳ぎを知らんと云うので這入らぬ。

よし、俺が泳がせてやる、と云つて無理に連れ込んだ、処が実は自分の泳ぎが出来て居ないくせに、年上の大きな者に抱き付かれて居るものじやから、いくら力を出して泳いでも不可ぬ。

二人とも溺れ死にそうになつた。これはと思つて連れの手を離して、やつと俺一人上つた。

上つたものの連れを見ると、だんだん溺れ死にそうになつて居る。これはいかぬ、俺が無理に引込んで置いて、殺しては、俺もどうせ死なねばならぬ、どうせ死ぬなら一所に溺れて死のう。

即座に決心がついたから、又飛び込んだ、そして其奴の手を取つて、背にかついで、めくら滅法にバタツいた。無我夢中でやつた、すると、ひょいと蹴つた足が砂に付いた、それに元氣付いて、やつと浜に辿りついた。

その時、少しでも躊躇したら、二人とも助からなかつたね。

俺の子供の時分

俺の子供の時分は、不可ぬ奴じゃった。親の言う事も聞かねば、兄なぞをいじめつける様な始末で、殆んど我がままの仕放題じゃった。

大抵な嫌われ者じゃった。しかし親父だけは大変俺を可愛がつて、言うてもとても聞かぬから、やる様にさして置けと云つてはおつて居いた。

まだ士族とか云つて、威張つて居る時代で、西瓜の切り売りなどを買つて食うのは乞食かなどのように云うて

居った。それを俺が是非食うと云う、許さなければ黙って搦んで食うと云う風じゃから仕方なしに買食いを許した。

菓子でも、菓子屋の前に立って、食いたいと思うと誰が何と云っても搦んで食った。内でも手の付け様がないから、通帳を遣^やってね、俺が食っただけ付けて置いてくれと云って菓子屋にやってあった。

嫌な事と来たら、見向きもしなかった。しかし学問は兄なぞにも、やらにや不可^{いか}ぬ位に云って俺が勧めた位で、自分の氣に入^いった学問は可^か成^なりよく覺えた。

七つの時に、親父や兄なぞと一緒に、水士烈伝の講談を聞きに行った。水戸の浪士が、桜田門外で井伊大老を討つ講談で、非常に面白かった。家に帰って丁度聞いた通り一字一句も違^{ちが}わさずやった処が、親父なども驚いて居った。

好きな書物はよく読んだ。記憶力は良かった様じゃ。十二、三位までは殆んど我がまま一点張りで、人の物は我が物、我が物は我が物と云った風じゃった。

十四の時に『論語』を読みよったら、子曰く「道に志して悪衣悪食を恥ずる者は、未^もだ与^よに議するに足らず」とか云う事が書いてあった。これはひどく頭に響いた。

それから我がままをがらりやめた。自分の物も人にくれるように決めた。悪衣悪食宗に宗旨代えした。それ迄は甘い物でも、家内中のを一人で取上げて食うと云う風じゃったが、一切反対にやることにした。

雪の降って積ってる中に、煩杖^{わんじょう}どもついて、雪の中に寝転んで、他所^{よそ}で琴を弾^ひいて居るのなぞ聞いて居った事もあった。

十五、六まで、滝田と云う学者の塾に通った。その時の年長者仲間^{としやうしやう}に栗野（子爵）平賀（大坂の義美博士）なども居た。栗野は俺よりは四つ位年長で、二十位じゃったろう。仲々学問がよく出来て居った。

俺はしかし塾中で、皆から憎まれ者じゃった。棒にも箸にもかからぬ様に云われて居た。それで俺も、どうせ

悪く云うなら、うんと悪く云わせてやろうと思つて、出来るだけ憎まるる事をやつた。

俺が一番年少ではあるし、仕たい放題をやつた。手水鉢ちゆうすいばちに小便を垂れ込んで置いて、それで以て手を洗わせて、後からあれは小便じやつたと云つたり、門の上に登つて居つて、下通る奴に頂あたまから小便引っかけたりした。塾中の者が團結して、俺を疊伏せにやろうと云う事をきめた。いよいよ今夜やると云う晩になったから、どうせやられるには違わぬ、しかしやられても構わぬから、あつと云う程皆の度胆を抜いてやろうと思つて、五寸位の、良く切れる短刀を、少し鯉口を切つて側そばに置いて寝たふりをして居た。しかしその晩は疊伏せに來なかつた。來て居つたらやられて居つたかも知れぬ。実は寝たふりの心算ツモリが本寝入りして居つたようじゃ。遂々一度もやられずに済んだ。

その次には亀井の塾に行つた。亀井は紀十郎と云うて四十位の人であつた。俺が十七位じやつたが、亀井とは俺が十四位から、碁の友達じやつた。実は、初めは碁も亀井に教しほわつたが、暫らくして居る中うちに同じ位になり、後には俺の方が強くなつた。年は親と子程違つて居つたが、亀井はよく俺の家に碁打に遊びに見えた。

処が、亀井先生、財政の都合上、役人になることになつた。丁度その時の、熊本の県令安岡というのが亀井の門弟じやつた關係から、熊本県庁の役人になつて熊本に行く事になつた。

或る日熊本から、亀井先生、俺の家に來て、俺に役人にならぬか、実は県令の安岡とも話を決めて來た、何をするとは決めて居らぬが、県令も非常に賛成で、亀井も碁打やら何やら、友達が出來て大変都合じやからと云うのじやつた。

その頃が、士族をやめて、何か働かねばならぬという、帰農帰商などをやかましく云う時分じやつたから、親達も至極賛成じやつたので、俺さえその気ならすぐにでも連れて行きたがつて居た。

しかし、俺は役人する為に學問して居る訳ではなし、學問の御相手ならするけれ共、役人の相手は辞やめつた。処がその年、神風連しんふうれんが起つて（明治九年）、鎮台と県庁を夜襲して、種田少將と、安岡県令とを伐つた。俺が役人になつ

て居れば、当分安岡県令の内に遊んで居る事になって居たそじゃから、俺の首もやられて居たに違いない、もちっとのことで首をいく処じゃった。

その頃からずっと学問して居たら、博士位になって居ったかも知れん。記憶はよかったから、その当時は先生の読んだ処を暗記さえして居ればいいので、訳はなかった。先生の声色までそっくり覚えて居たからね。やらすればなかなかよかところやおった。しかしこれもやらす、役人にも縁はあったがならなかった。

青年期の東京生活

自分が丁度二十六、七の頃、牛込の佐内坂に、元氣な連中と六、七人で居った。初めの内は着物を作ってやり、布団を買ってやり、洋傘を求めてやるして居ったが、何時の間にかそんな物は忽ち無くして仕舞う。後には冬は布団無し、夏は蚊帳なしで、雨や雪にでも降られようものなら、着類をうんと濡して置いて、内に帰って全然抜き捨てて、素裸になって押し入れに這入る、そして襦を締切って「こいつは暖かい」位の調子でいつも襦が布団じゃった。



25 歳頃の肖像

飯は近所の弁当屋から取寄せて食って居ったが、その食料が又一、二ヶ月位は滞りよった。或る時自分等が二階の押し入れに寝て居ると、飯屋の女中が掛け取りにやって来て、「お払いは如何ですかねー」と云う声が如何にも可笑しいので二階から「くすくす」笑った。処が声がすると思うものだから二階の梯子に上って来て、また「御払いは如何ですかねー」と云うた、その途端に、大きな男が幾人も押し入れから真裸で飛び出した。驚くのも無理はない、女中は一散に駆け戻った様な奇談もあった。

当時はまだ、郷里に帰るにも汽車はなし、船位で往き来して居っ

直話集Ⅱ 一代回顧談

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

はしがき

獅子の口へ拳を突っ込む人、出来ない相談に乗って呉れる人、これが頭山立雲翁おとうの特色である。翁は無位無冠にして、歴代の政府を監視し或いは随使しして来た人でもある。私はこれを国宝的存在と信じている。で、私はかねてから、永く後世に残るべき翁の閥歴談を編むことを発意し、これを立雲翁に進言し、同時に翁の最も親近閥係に立つ浜地天松居士に図り、また頭山翁夫人及び令息立助君にも囑して、遂に翁の承諾を得、その一代の閥歴を作る事となった。

翁自らいわく、「俺は無精者で、自分のことなど詳しい話をせぬから、自分のことを書いたものは大抵また聞きじゃろう」と。

そこで私は一言一句、翁の口唇を洩るもののみを書き集めることにした。最初、こっちから話題を提供して一ヶ月もしたら出来上がるものと思うたのが、座上、客常きやうじょうに満ちて用談に忙殺され、かつ本来寡黙なる翁の事とて、翁一身上の談はほとんどこれを聴く之余閑なく、一年有半の間、翁の邸に日参同様にして、やっとこれだけの材料を得た。正にこれ、牡蠣かきの中から真珠を拾うの思いであった。それだけこれは最も貴重なる、立雲翁唯一の直話じきわである。もしこれを敷衍ふえんしたり、修飾しゆししたりしたら、一項目優に数十頁にもなりそうなのを、私は忠実に、翁の閥歴談をそのままに伝えて、その真面目しんめいを如実に現わし、一言一句の間に、機微なる点睛の妙味を示そうと努めた。翁の座談は、飾らずして巧みに天真流露を見る。以下翁の直話に移る。

(編者記)

*

これが自分の身の上話の初めてじゃ

私は無精者で、自分の事を話そうと言うて話した事はない。七、八年前、玄洋社の者が、書きたいから話をし
て呉れと言うたのを書かせなかった。これまで、雑誌や何かの本に出た私の閱歴わしに關した話というのは、大抵復また
聞きじゃろう。私の事を書くからと言うて断りに来たのはあったが、唯それだけの事で、私はそれに自身の事を
話してやったような事はない。私は何を書かれても構わん。唯天が眞実を知る。知己を天に求むるのじゃ。……
ま、そうじゃ。これが、自分で自分の事を語る初めてじゃ。

本を読む事は好きであつた

本など読むことは、私は兄弟中一番好きで、記憶もよかつた。先生の話は口うつしによくやつたもので、輪講
をやると一番出来がよかつた。三つ違ひの兄に勧めて本を読ませた位だ。私の読書か？ 春秋左伝あたりまで
じゃつたらう、外史や靖猷遺言せいけんいげんのようなものは誰でも読んだのじゃ。父は放任主義で、自分を一番可愛がった。
私には何んの苦勞もなかつた。

独りで淋しくない

そこで、わざと飯も食わんで、身を苦しめて見たり、山中へ入つて仙人の稽古をするなんぞと、好んで苦勞を
して見た。側から見たら、私は浪人者故、不遇と思うだるうが、不満も不平もない。第一私は退屈するといふこ
とのない人間じゃ。独りで淋しくない。大がいの者は独りでは淋しがるが、私は何んともない。兄が今もいう。

「お前は子供の折から一人で淋しくないといったが、今にそうだ」と。

私はとにかく、生得仕合わせに出来た。幾度も殺されるようなことをしても、自分がかすり傷も負わない。運

が強いというのじゃろう。人が心配をするような冒険に興味があった。

少時私の読書法

私の読書法は、気に入った処だけを肚へ入れるまで熟読したものじゃ。十八史略を読んで、禹が江を渡る処で、黄龍現われて舟を覆う条下で、禹王が泰然として、『生は奇なり、死は帰なり、龍を観る事、蝦蟇（りやも）の如し』とかある処で、

「ここだ！」と考えてその時の禹王の心持ちになって見る。

また、項羽が始皇の巡狩の行列を見て、

「取って代わらん」と目をいからして進み出ずる処を読むと、

「これだ！」と、また項羽の肚になって、その勇気の勃々たる処を考える。項羽は快男子じゃ。事成らずといえども、男子として堂々たる一生じゃ。

己れは泣かぬ児であつた

客「私が外国に居った時、その家の主人が旅行に出て細君が留守をする。夜になって、淋しいから、私に細君の室へ入って話でもして呉れと言います。私はそれはいかんというて、自分の室へ鍵をかけていると、細君は淋しいと言うて子供の様に声を揚げて泣き叫ぶので、驚き呆れました」

翁「世界中、泣かないのは日本人ばかりじゃろう。どこの国でも、大人が声を放って大いに泣くと書いて居るようじゃ。私は幼少の折、母に物をねだる時の外は、声を出して泣いた事はなかった。外では決して泣かなかった」

俺の碁将棋は真剣だと強くなる

二度目の鹿児島入りの帰途じやった。川口雪蓬や、河野主一郎などに会うて来たのじゃ。その帰りに加治木へ立ち寄ると、道路から直ぐ見える店先の様な処で碁を打ち居る。私は立ち留まって見て居たら、何時までも見て居るもので、彼方で、

「お前さんは碁をやりますか？」と問う。

「お前達位は打てよう」というと、

「そんなら一お願いしよう」というので、向こうが白を取る。

「田舎の碁打ちが、そんな我がままをするものでない」と私は叱って、「握りで行こう」という事にした。

私は白になって打つと、うんと勝った。二番やったが彼奴また負けた。口惜しがって、町で一番強いというのを連れて来たが、これも駄目じゃ。まるで相手にならん。

「あなた様は初段で御ざいましょう」という。私は加治木初段になった。

碁は十三歳の時、郷里で覚えた。近所の老人が毎日碁を打ち居るので習った。間もなくその老人を負かして、五ツも置かせるようになった。

後、玄洋社で、かけ碁をやった事がある。牛肉屋とやったのじゃ。元は士族で相当の人間じゃ。それが牛肉屋を開業して繁昌して居った。

「貴様が負けたら、玄洋社の者へ牛肉を御馳走せ」というと、

「宜しい」という事で、私が負けたら、自腹を切って牛肉を買って皆んなに振り舞う事にしてやった。

平生は、この男は私へ五目置くのじゃが、

「今日は真剣じゃからせい目で来い」というて、せい目でやらせた。

附録 頭山満先生

夢野久作

一

諸君は頭山満という老翁^{おじい}さんの名前を、時々新聞で見たり、話に聞いたりされるであらう。同時にその頭山満という老翁^{おじい}さんが大変に偉い人である事も知って居^おられるであらう。

しかしその頭山先生が第一に「ドンナ風に偉い人か」、第二に「何様^{どう}してソンナ風に偉くなったのか」、第三に「どんな偉大^{えち}い事をした人か」と云うような事をハッキリ知っている人は余り無いであらうと思う。

ホントの事を云うと、そう云う筆者^{わたし}も頭山先生の偉い処^{ところ}を「から十のドン底まで知り抜いている訳では無い。ただ何度^{なんど}も頭山先生にお目にかかったり、人の話を聞いたりしているお蔭^{かげ}で、普通の人よりもイクラか余計に知っているだけの話である。

ところで頭山先生の事を書く前に、何よりも先にお断りして置かなければならない事は、頭山先生が、諸君の知って居られる豊太閤とかナポレオンとか云うような英雄、豪傑なぞの偉大^{えち}さとは、まるで違った意味の豪^{えら}さを持つて居るのである……と云う事である。頭山先生の尊^{そん}とい処^{ところ}は東郷元帥、乃木大将、荒木大将なぞ云う人の尊^{そん}とい処^{ところ}と、いささか違っている……という事である。

それがドウ違^{ちが}って居るか云う事は、これから先の伝記を読まれば自然とわかる事であるが、何よりも第一に大変に違^{ちが}うところが一つ在る。それは外^{ほか}でも無い。

SAMPLE
Shoichi Shinsui.com

頭山先生以外の偉人とか豪傑とかの伝記を読んでいると、少年諸君ばかりでなく筆者自身のお手本になりそうな事がイクラでも出て来る。すこしでもいいから、そんな人々の真似を少年諸君がやって呉れるといいがな……と思われるような感心な、立派なことが続々と出て来るのであるが、この頭山先生の伝記に限っては正反對に、少年諸君が真似をしてはイケナイ事がイクラでも出て来る。そこが、ほかの偉人豪傑と頭山先生の違うところである。

こんな風に云うと、「それならば頭山先生は悪いことばかりして豪くなつた人か」と諸君は早合点されるかも知れないが、決して左様では無い。

それならば何故頭山先生の真似をしてはいけないのか。そうして頭山先生は、そんな風に他人のお手本にならないような事ばかりしながら、どうして、そんな偉い人になられたのか……それは左に掲ぐる頭山先生の稚少時の逸話を読めばわかる。

頭山先生の幼少い時の名前は筒井乙次郎と云って、安政二年四月十二日に福岡市西新町の筒井亀策という人の第四番目の子供として生まれた。頭山という苗字はこの乙次郎少年が、後に頭山家へ養子に行つてから名乗つたものである。

翁の生まれた家は今でも福岡の西新町に在る。西新町の警察署に近い大きな楠木の立つて居る家がソレで、そこいらの人に聞くと叮嚀にお辞儀をして教えて呉れる。

翁のお父さんの亀策という人は元来、福岡藩の百石取りの馬廻役と云つて、武士の中でも可なりのお金持の家柄であつたらしい。お母さんの名前をおいそと云い一番の姉さんがおさき、その次の長男の兄さんが亀来君、その次が正次郎君という兄さんであつた。つまり乙次郎少年は一番末っ子の三男坊で、家中から「乙しやん乙しやん」と可愛がられて育つたものであつた。

ところがこの三男坊の末っ子の「乙しやん」はだんだんと大きくなるに連れて、普通の子供と違つて来た。第一、とても腕白で家中の者の手に及えないばかりでなく、外へ遊びに出るとそこいら中の餓鬼大将になつて、自分よりもズツト年上の者まで輩下に付けて、大暴れに暴れまわるのであつた。

そればかりでない。「乙しやん」の腕白ぶりは、ほかの英雄豪傑連中の幼時の話として伝えられて居る腕白ぶりとは

非常に違った処があった。

「乙しゃん」は何処へ行っても、どんな事が起つてもボンヤリとしてヌーッとしていた。着物が汚れて居ようが、下駄が切れていようが、又は怪我をして血が流れていようが平氣の平左のクリクリ坊主で、鍛冶屋の店先へ突立って、何時までも何時までもトッテンカントッテンカンの音を聞きながら見惚れている。そのうちに飽きてしまうと何処かへフーッと行ってしまう。近頃流行の言葉で云えば、「乙しゃん」は何処から見ても間違いの無いヌーボー式少年であつた。

こんな事がある。

乙次郎少年が、まだ十歳にならない時分の寒い寒い冬の日の事であつたと云う。家の人から十錢のお金を貰つて蒔蕪こんじやくを買いに遣られた。その頃はまだ物の値段の安い頃の事で、蒔蕪こんじやくなんぞは二、三錢も買えば山のように来る時代であつたので、多分五厘か一錢がトコ買つておいでと云われたのであろうが、向うの店へ行つて乙次郎少年がヌーボー式に黙つて十錢の金を出すと、蒔蕪屋のおやじが意地の悪い奴か何かであつたろう。氷のような水の中から十錢がトコの蒔蕪こんじやくを数え出して、土間へ山のように積み上げた。そうして乙次郎少年を振り返つて、

「何か容物をば持つて来なさつたな」

その時分の習慣としては十や二十の蒔蕪こんじやくなら藁わらへ突きつないで持つて帰ることになつたので、むろんソナに沢山の蒔蕪こんじやくの、容物いれものなんか持つて来ていなかった。

しかし乙次郎少年は驚かなかつた。相も変らぬヌーボー式に黙つて自分の着物の懷中ふところを開いて、「ここへ入れて呉れ」と云う風に指して見せた。そうして蒔蕪屋の親爺がアベコベにビックリして居る眼の前で、その冷めたい冷めたい切れるような水だらけの蒔蕪こんじやくを片端から自分の懷中へ摺み込んで悠々と歸つて行つた。「乙しゃん」のヌーボー式は馬鹿か豪傑かわからなかつた。

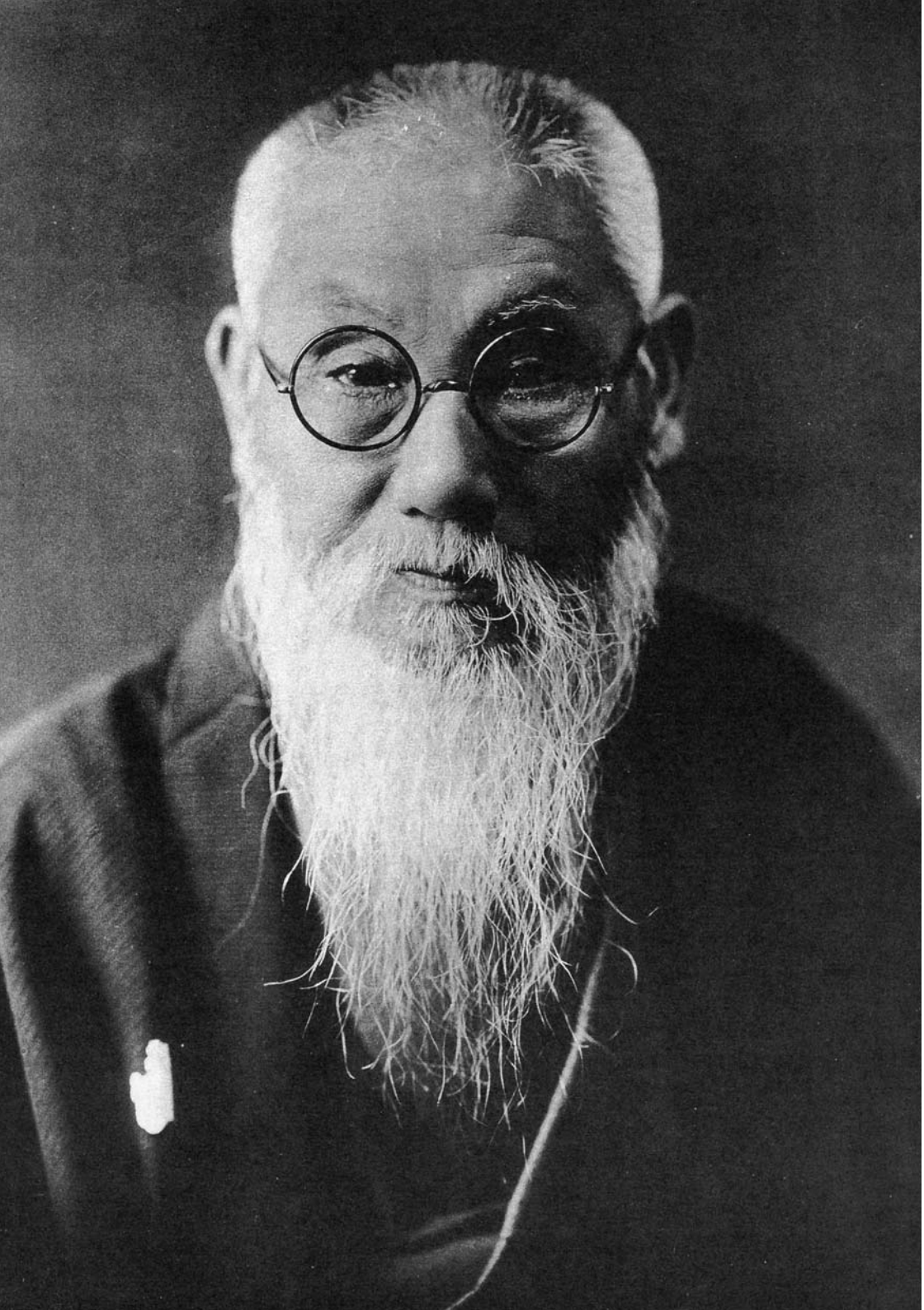
まだある。

「乙しゃん」がハツカ九ツの悪戯盛りの時代に、福岡県の嘉穂郡の山本と云う家に養子に遣られた事があつた。しかし養子に行つても自家うちに居つても、「乙しゃん」のヌーボーとした腕白はチットモ変らなかつた。ヌーッとしてボーッ

附録

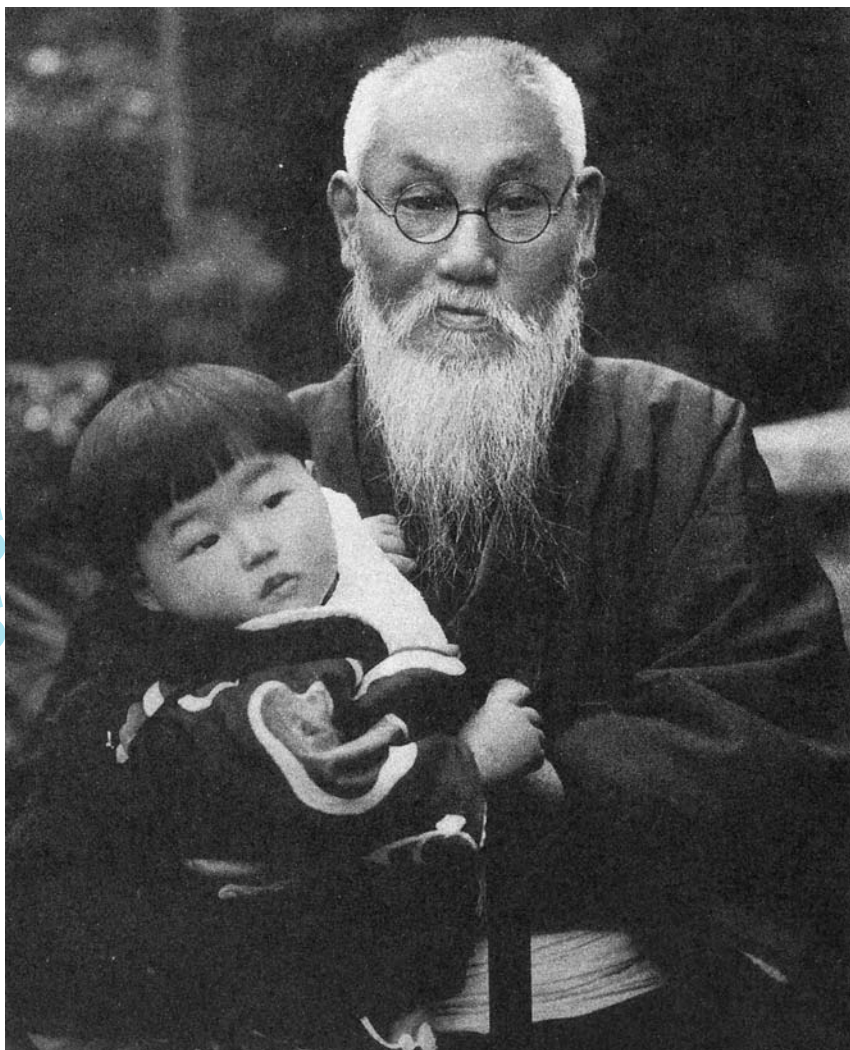
頭山満写真集

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

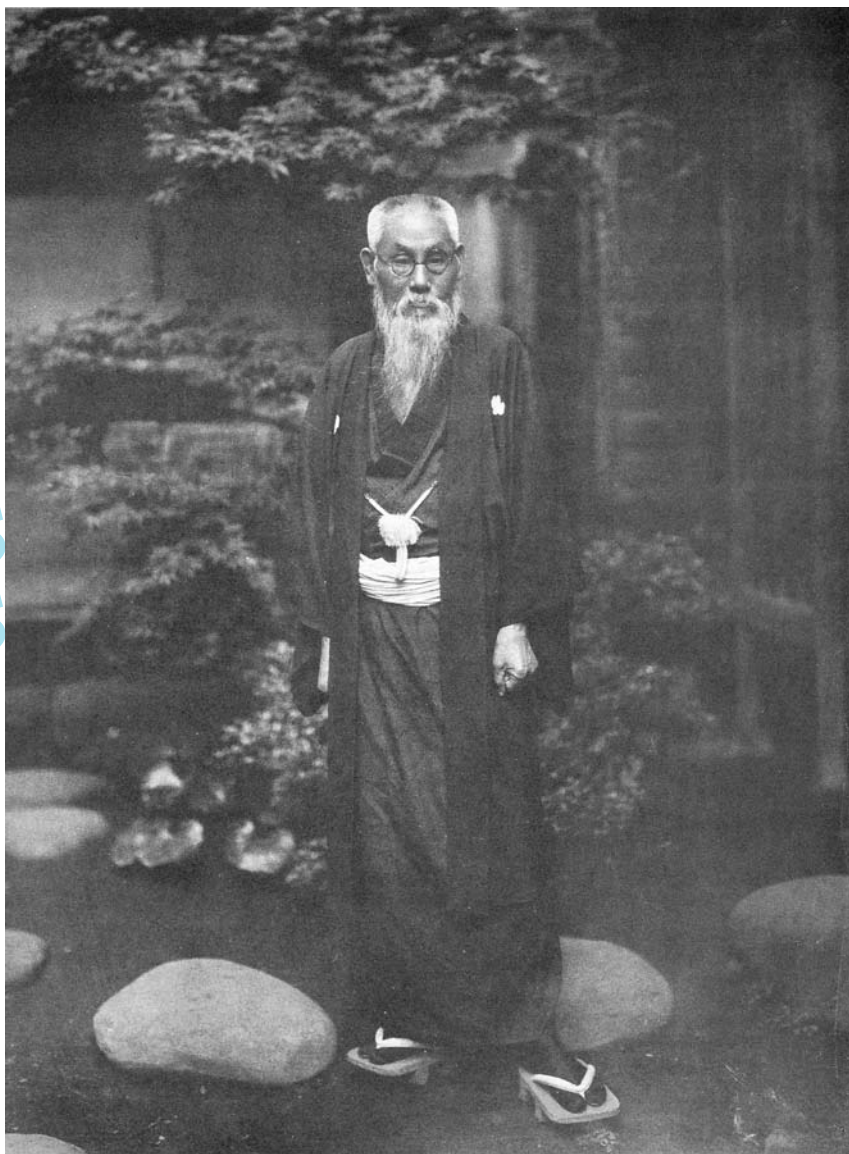




妻峰尾と。夫妻の間には十人の子女があった。



1933年春、三男秀三の娘松子と。



70歳頃。



1931年6月2日、生家筒井家の庭にて。



渋谷区常盤松町12番地の頭山家。赤坂霊南坂の家が関東大震災で焼失した後の家。



浜の家時代。37、8歳頃。



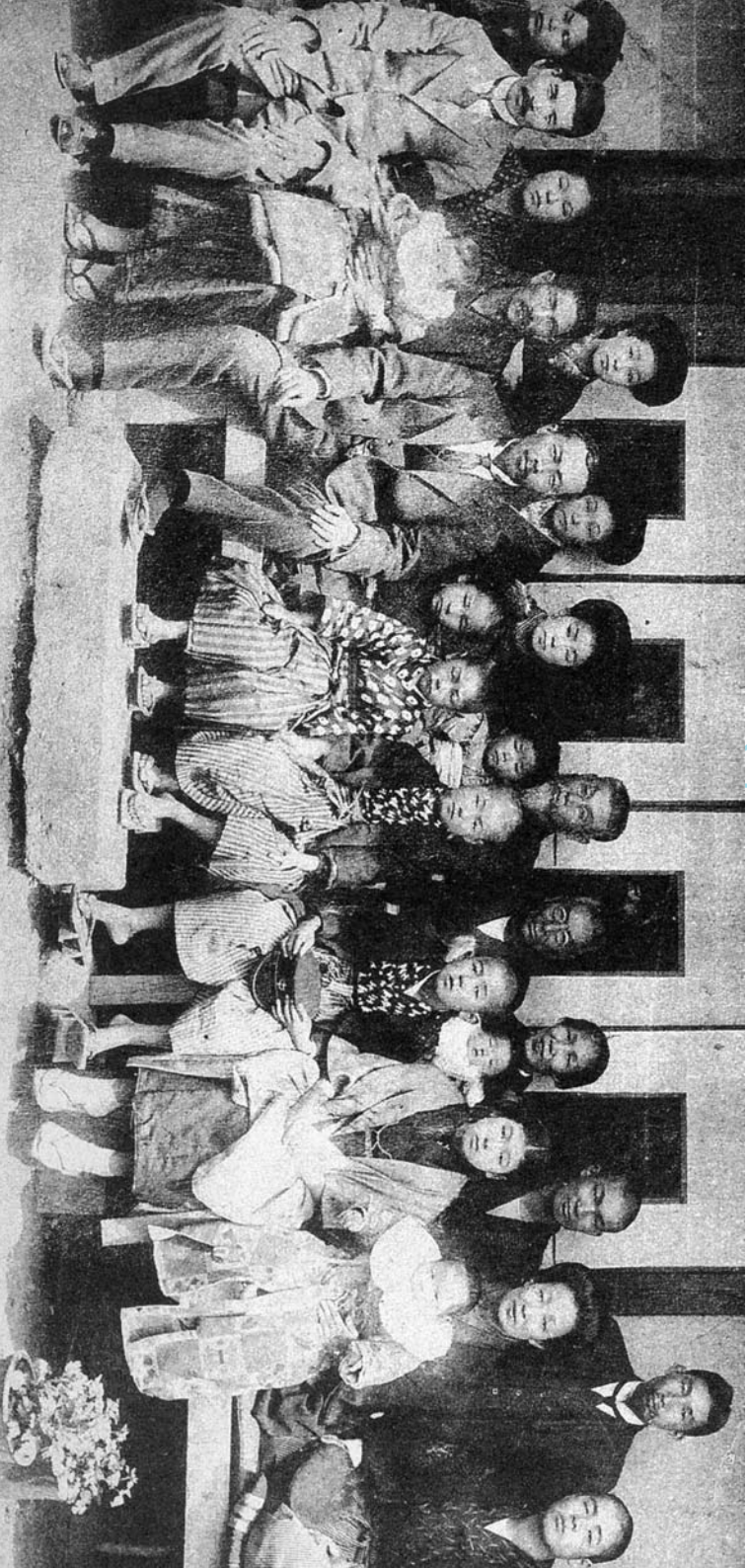
浜の家時代。



1904、5年頃、玄洋社社員らと。前列向かって右から、末永純一郎、杉山茂丸、進藤喜平太、内田良五郎、頭山滿、福本日南、月成功太郎、児玉音松、月成勲、的野半助、内田良平、大原義剛、古賀壮兵衛、武井忍助。



1904年、滿洲義軍出発前の送別会記念写真。頭山の間から右は当局との間で義軍編成の斡旋をした浦上正孝、前列右端宣野長知、左端安永東之助、その右柴田麟次郎、後列右から真藤慎太郎、小野鴻之助、福住（のち金子）克巳、福島熊次郎。



57、8歳頃家族と。前列向かって右から、五男乙次郎を抱く妻峰尾、五女岩生、二男泉、三男秀三、筒井楠雄、大藤八重子、長女タツ子夫大藤直哉、二女藤子夫筒井条之助（頭山満兄筒井亀来長男）、三女シヅカ夫松原彦介、後列右から、書生大野（のち宮崎）研吉、鷹取忠門、長男立助、妻峰尾母歌子、兄筒井亀来、頭山満、長女タツ子、二女藤子（トラキチ）、三女シヅカ、女中二名。なお四男康吉と四女発子は夭折。



金婚式内祝の記念写真。前列向かって右から、長男立助、頭山満、妻峰尾、中列右から、三女シヅカ夫松原彦介、二男泉、長女タツ子、三女シヅカ、三男秀三妻操、五女岩生、後列右から、五男乙次郎、二男泉妻喜美子、長男立助妻鶴子、枠外右から、三男秀三、長女タツ子夫大藤直哉、二女藤子（トラキチ）。